



農業の6次産業化について考えた講演

県内の農林漁業者や食品事業者らが連携し、新たなビジネスを探る2018年度の6次産業化異業種交流会が2月27日、和歌山市手平の和歌山ビッグ愛で開かれた。基調講演ではこれら農業経営や6次産業化について考えた。

県と県6次産業化サポートセンターが共催する恒例の交流会で、7年目。事業者や支援機関行政関係者ら約80人が参加した。基調講演では同センター代表ランナーの高橋太郎さんが講師を担当。現在の農

6次産業化に向け交流

異業種事業者ら80人が学ぶ

業について、後継者が不足する小規模農家の廃業が進行し、大規模農家に農地が集約していると説明。規模が大きくなれば大量の農産物の供給が可能となり、直接、食品加工品やスーパーと商談できるなどのメリットを話した。また6次産業化の基本は農業経営であると述べ、自らの価値を伝える手段として捉えるよう提案。農業経営の基礎を強化し、商品サービスの付加価値を高めることがの重要性を説いた。

今後の農業経営を進める上で求められるポイントとして、大規模農業の場合には、他社に負けない品質や価格、生産量の安定化、人材確保機械化などの手法が必要になると指摘した。一方、小規模農業の場合は一般流通

にはない味や香りなどを、農産物の特徴を追求することを強調。「社会の変化を見据え、今後求められるであろう食のニーズに対する不斬の

技術開発が求められる」と話した。基調講演の他、(有)新岡農園の竹内智美さんが事例を発表し、日本政策金融公庫和歌山支店の森下を交換した。

情報

勝弘さんが県内の公庫資金活用事例と公庫の輸出支援などの情報提供。交流会では加工品を試食・試飲しながら、情報